

総括



今年度の「木育デザイン虎の穴」は、オンラインによる研修が中心となりました。このことは、受講者のみなさんにたくさんのご不便をおかけすることになった一方で、昨年度と異なり、日本全国からの参加という望外の状況を生み出すことができました。主催者を代表して、参加していただきましたすべての受講者に感謝申し上げます。

さて、参加いただいたビギナーコース30名の受講生、そして20数名の聴講生は、3か月6回に及ぶ長期間にわたって講義の聴講、課題の提出に取り組んでいただきました。またアドバンスコース6名の受講生は、製品の改良、そして新製品のデザインに取り組み、4か月という短期間に試作まで対応いただきました。研修の中で誕生したさまざまなアイデア、そしてデザインは、非常に興味深く、すぐに製品化できそうなものから、将来性の高いアイデアなどが含まれ、私たちも驚きの連続でした。

新しいものをつくり、それを拓げる、まして木材利用に資するといった成果を上げることは非常に大変な作業であり、今回のデザイン、アイデアはさらに時間をかけてブラッシュアップしていくことが必要です。ただ、提出された様々なデザインからは、私たちが木育ツール、木育空間デザインにおいて最も重要と考えてきた、木育、子どもそして保育についての理解が、確実に伝わっていることを感じる事ができます。私はそのことが最もうれしく、今年度の最大の成果であると思います。

多くの方との会話、デザインに関するディスカッションを通して、私たち主催者も多くを学ばせて頂きました。それはこの研修会をよりよくするためのヒント、課題であることはもちろんですが、私たちがさらに質の高い木材活用を進める勇気や自信につながったと思います。

今回のつながりを大切にし、得られた多くのアイデアを1つでも実現できるよう、私たち主催者自身も今後も努力を続けてまいります。引き続きよろしく願い申し上げます。

「木育デザイン虎の穴」主宰 浅田 茂裕 (埼玉大学 教授)

令和2年度 顔の見える木材での快適空間づくり事業
木育空間デザインプロジェクト「木育デザイン虎の穴」

NPO法人木づかい子育てネットワーク
<https://www.kizukonet.com/>

株式会社サカモト
<https://eco-sakamoto.co.jp/>

木育デザイン 虎の穴

令和2年度 事業報告書



この試練を乗り越えて
お前は虎になるのだ



木づかい子育て
ネットワーク



あいさつ

浅田 茂裕 埼玉大学 教授

近年の木育、木を使った自然保育に対する認知の高まりの中で、学校教育や幼児教育の施設、家具、学習ツールに木材製品を用いる例が増加しています。手触りやあたたかみなど、木材の持つ生理的親和性、環境親和性を活かした様々な製品や施設—木育ツール、木育空間は、子どもの遊びや学びを豊かに支えることが期待されており、様々なアイデア、デザインが提案されています。

優れた木育ツール、空間のデザインには、木材の性質、加工特性などの理解だけでなく、ユーザーとしての子どもや保育についての理解が欠かせません。子どもの学び、発達を知り、保育者がめざす保育のかたち、おもいに寄り添うことで、木育ツールは保育環境の中でその力を十分に発揮することが可能となります。私たちが進める『木育空間デザイン虎の穴』では、木材の良さを生かし、保育の中で生かせる木育ツール、空間をデザインできるデザ

イナー養成に向けて、受講者の主体的、能動的学びを重視した研修会を開催してまいりました。

今年度は初級編、上級編に分けて開催し、多くの受講者とともに、よりよいデザインのための学びを進めました。残念ながら、新型コロナウイルス感染拡大のため、多くの制限がありましたが、保育の実践者、経営者をはじめとする多くの専門家との対話的学びを通じて、いくつかの製品開発、プロトタイプ作成につなげることができました。

この報告書をご覧ください、その成果について多くの皆様にご確認いただき、よりよい取り組みとなるようご指導、ご助言を頂けましたら幸いです。



虎の穴2020に思うこと

古川 泰司 アトリエフォルカワー級建築士事務所 代表

昨年度に引続き開催されることになった「木育デザイン虎の穴」ですが、今年度は昨年度の受講者に対してさらに木育デザインについてブラッシュアップしていただく、アドバンスコースを設けることになりました。これで、座学を中心としてデザインのエスキースチェックまで行うビギナーコースとの2コース開催となりました。

もともと、デザインを身につけるためには、実際の保育施設を見学したり、手を動かした実習が必須です。しかし、今期はコロナ禍にあって、保育施設の見学も対面で行う実習も実現が難しくなりました。我々講師陣も、オンラインでどこまで出来るのかに挑戦する必要がありました。

特に、試作品までつくることを目標としたアドバンスコースは、受講生を少なく設定し一人にかかる時間を十分とることや、講義の延長も毎回行うなどできる限りのこと

をやることで、試作品の完成まで実現することが出来ました。

また、ビギナーコースでは、受講生の居住地に縛られないことから、遠くはフィンランド、福岡、名古屋、静岡、岩手などからの受講生も参加して下さることになり、オンラインの可能性を感じる事が出来ました。

また、施設見学については、あらたな試みとしてオンライン見学会を行いました。受講生からの「オンラインではどうかと思っていたが、予想外によくわかった」というコメントもいただける結果となり、動画などを使っての工夫が良い結果を生みオンラインでの手応えも感じる事が出来ました。



第1回 10月10日(土) 14:00-16:00

- ① 木育・保育の理解 (序論 ~ 基本理解と課題提示) 浅田 茂裕
- ② 木育空間のデザインについて (総論) 古川 泰司
- ③ 保育環境の意味と役割 浅田 茂裕
- 今回の課題提示 「主体的な遊び手をつくる木育ツールのデザイン」

条件

- ・ 0歳児~5歳児までの子どもを対象とする
- ・ 国産木材 (埼玉県・西川材) を積極活用する
- ・ 実際に生産できるもの (売れるもの)
- ・ コストについては、今回はとくに重要視しない
- ・ 子どもが2人でもてる程度の大きさ、重さ

受講生の課題

- 自分の考えたデザインまたはアイデアについて
- ・ 言語として表す (誰のために、何のために、どのように…)
- ・ 図 (ラフスケッチ) として表す
- ・ 講師に提出、みなさんの前で発表する



第2回 10月24日(土) 14:00-16:00

- ④ デザインコンセプトのまとめ方 浅田 茂裕
- ⑤ 保育理解 森のようちえん型保育 関山 隆一 (NPO法人もあなキッズ自然楽校)
- ⑥ 保育理解 自分で考え、行動する思考を育む保育園 荒川 直志 (社会福祉法人どろんこ会)
- 課題エスキースチェック

第5回 12月5日(土) 14:00-16:00

- ⑪ 保育所事例の視察・バーチャル見学会の実施 古川 泰司 ~埼玉県東松山市桑の木保育園
- ⑫ 体験ワークショップの開催 浅田 茂裕 木材の性質・ミクロの話 ★事前に教材を送付
- 課題エスキースチェック

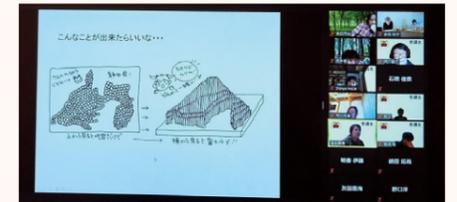
第3回 11月7日(土) 14:00-16:00

- ⑦ 木育空間デザインのプロセス理解 奥 ひろ子 (パワープレイス株式会社)
- ⑧ 木製品の商品化までのプロセス 酒井 慶太郎 (酒井産業株式会社 代表取締役)
- 課題エスキースチェック



第6回 12月19日(土) 14:00-16:00

- ⑬ デザイン成果発表会の開催 受講生によるプレゼンテーション



※オンラインと併用で埼玉大学での開催を予定していたが、コロナ感染拡大の影響を受け、全てオンラインでの開催となった

第4回 11月21日(土) 14:00-16:00

- ⑨ 木育ツールの特徴と機能 浅田 茂裕
- ⑩ 木材生産と加工の基礎知識を学ぶ 坂本 幸 (株式会社サカモト)
- 課題エスキースチェック





バーチャル見学会

保育所事例の視察

ビギナーコース第5回目はオンライン保育施設見学会を実施。あらかじめ撮影した施設の様子や保育者のインタビューを動画で流し、そこに講師の説明を加える形で1時間ほどの見学会となりました。

桑の木保育園について

桑の木保育園はわらしべの里共同保育所につづく、社会福祉法人わらしべ会の保育所であり、子どもたちの木の家をコンセプトに設計をさせていただきました。埼玉県産材を100%使い、特に構造材についてはJAS機械等級区分構造用製材として木材の品質についても配慮しています。

実際にできあがった空間では子どもたちが木の床を楽しむように走り回ったりゴロゴロ遊びをしていたり木育空間を実現できたのではないかと思います。

(古川 泰司)

撮影：畑 拓



●課題発表の一部



当初はリアルとオンラインを同時開催で行う予定でしたが、コロナの感染状況を鑑み、全てオンラインにて開催しました。

15名の受講者が発表を行い、力作ぞろいで講師も熱くなる、3時間近くのプレゼン大会となりました。

成果発表会

受講生のアンケートより

いろいろなジャンルの方が参加されていたので、各講義の中での質疑や話題が、自分では考えなかった点も多く、聞いていて非常に面白かったです。

ものづくり、建築デザイン、自然保育、企業経営、アカデミックな視点、など、話題の幅が広がったことが良かったです。

保育所事例の視察・バーチャル見学会 保育所の図面を見ながらの動線説明だったので、非常に空間イメージがしやすかったです。

成功にたどり着くまでには、数々の失敗もあったかと。そこをどうやって克服したのか、お話できる範囲で教えていただければと思います。

木のことはある程度知識がありましたが、保育のことは全く知らなかったもので、その両面が学べて良かったです。

各講師の皆さんのお話はもちろんですが、課題で受講生の皆さんの自分にはない発想やアイデアが印象に残りました。

エスキースチェックも含めたくさんの方のアドバイスを学ぶことができました。課題のチェックをしていただくのは毎回とても緊張しましたが自分のイメージを具体的にしていけることが楽しかったです。ありがとうございました。

工場や現場への訪問、ワークショップへの参加等、直接各現場の方と顔を合わせて話ができる機会があれば参加したいです。

第1回 10月7日(水) 19:00-21:00

講師：浅田 茂裕、古川 泰司、坂本 幸、酒井 慶太郎
ゲスト：関山 隆一、荒川 直志

1部 講師、受講生自己紹介／アドバンスコースの課題について

2部 課題1 木製ジャングルジムの製品化に向けて課題洗い出し

- ・ジャングルジムの現状と機能説明、製品化への課題
- ※事前送付した見本部材を参照しつつ

3部 課題2 幼児教育施設における木育ツールの開発
～3人以上で遊ぶ木育ツール(遊具・玩具)

- ① 課題の設定について：古川 泰司
- ② 課題を作成するにあたっての想定する保育園事例：浅田 茂裕
- ③ 保育関係者の視点から(ゲストによるお話)
 - ・自己紹介、現在進めている取り組みの紹介
 - ・それぞれの視点から考える「木製のよさ」「よいと思う遊具・玩具」について
- ④ 質疑応答、フリーディスカッション



第2回 10月14日(水) 19:00-21:00

講師：浅田 茂裕、古川 泰司、坂本 幸、酒井 慶太郎

1部 木製ジャングルジムの製品化に向けて

- ・受講生から改善アイデアを発表、商品化に向けての検討を重ねる

2部 3人以上で遊ぶ木育ツール(遊具・玩具)の開発

- ・各受講生からのエスキースを提示、講師と受講生がコメント

第5回 11月4日(水) 19:00-21:00

講師：浅田 茂裕、古川 泰司、坂本 幸
ゲスト：関山 隆一

3人以上で遊ぶ木育ツール(遊具・玩具)の開発

- ・試作を見据えて、図面作成、スケジュールなどを確認

第3回 10月21日(水) 19:00-21:00

講師：浅田 茂裕、古川 泰司、坂本 幸

1部 木製ジャングルジムの製品化に向けて(最終回)

2部 講義「デザインコンセプトをつくる」：浅田 茂裕

3部 3人以上で遊ぶ木育ツール(遊具・玩具)の開発

- ・前回を受けて改良されたエスキースを各自発表。講師、各受講生のコメントからさらに改善点を洗い出す

第6回 11月11日(水) 19:00-21:00

講師：浅田 茂裕、古川 泰司、坂本 幸
ゲスト：荒川 直志

3人以上で遊ぶ木育ツール(遊具・玩具)の開発

- ・試作前の最終発表として、素材、試作方法などを細かく検討

以降、実製作を担当する(株)サカモトと各自打ち合わせを行いながら完成を迎える

成果発表会

2021年1月23日(土) 14:00-16:00

会場：飯能商工会議所 大会議室

講師：古川 泰司、坂本 幸 (浅田 茂裕)

ゲスト：井上 淳治(さま工房・木楽里 オーナー)、奥 ひろ子

- ・受講生デザインの試作4点を展示しつつプレゼンテーションを行い、講評をいただく



課題内容

【製品開発アプローチ】

各参加者が保育ニーズと木材の良さを生かした、新しい製品開発に取り組みます。対象とするのは、狭小な小規模保育所でも活用できる木育ツールです。この取り組みに対しては、保育の実践者の意見を伺いながら、求められる要素を見出し、木育ツールの企画・デザイン、そして試作を行います。

【課題】

- 3人以上で遊ぶ木育ツール(玩具、遊具など)
- 遊具、玩具など、室内における保育の質の向上に資する製品であること。
- 対象とする施設のニーズを一定程度満たすものであること。

【試作実制作】

株式会社サカモト

「バランスピン」

受講生 青木 健太郎(株式会社 京和木材)

バランスピンのネーミングは回転と均衡(バランス+スピン)をかけ合わせてみました。

3人でバランスをとったり回ったりしながら身体を使って遊びます。

持ち手はボルダリングのパーツを使い持ちやすくかつカラフルにし、子ども達に視覚的に興味を引くようにしています。

また、バランスをとって回転するところから宇宙ゴマをイメージするようなデザインにしました。



「木のうんてい」

受講生 高木 大輔・加藤 一郎(竹広林業株式会社)

小規模保育園などの決められたスペースで保育された子どもたちが次のステップ(幼稚園・小学校)になった時に、インドア派(カゴの中の鳥)にならないでほしい。屋内⇒屋外(世界)を見てほしい。そこで室内と外を繋ぐもの(遊具)があれば興味を持ち・行動するきっかけになるのでは?と思い、考えた遊具です。その遊具(うんてい)が木製で、屋外に庭木などがあればそれと繋がり、木への興味や関わりをきっかけに森に興味をもってほしい。そして2070年の日本のリーダーは森(海川)を好きな人になってほしい、そんな願いを込めました。限られたスペースの壁面に収納出来る、ということも機能の一つです。



「にほんのきの■(しかく)ちゃん」

受講生 堀内 良一(堀内ウッドクラフト)

「にほんのきの■ちゃん」は、昨年度の「木育デザイン虎の穴」の研修内容から生み出された作品です。狭い保育園環境の中で、一つの遊具でいろいろな遊びが引き出されるように考えました。構造をシンプルにすることで製作コストを下げるのと同時に壊れにくくし、敷くだけでよいので、置く場所や収納を選びません。平面構造ですが、マグネットが付いているので立体物も作れます。多様な使い方ができる遊具となっています。



「アイスクャンディーバー」
みんなで 運んで 繋いで 遊ぼう

受講生 三輪 良恵(MIWA Atelier)

シンプルな形と一人では扱えない大きさ、多様な組み合わせが可能な数を用意し、小さな子どもたちが3人くらいで「うんしょ、うんしょ」と運び、重ね、並べ、繋ぎながら、自分たちで遊び方を生みだせる遊具を目指しました。

そして、デザインモチーフを子どもたちの大好きなアイスクリームにしたことで、子どものみならず大人も、小人になったような気持ちで遊びの世界をつくり、一緒に楽しむことができました。



試作の実製作にあたって

坂本 幸(株式会社サカモト)

タイトスケジュールに加え、本来ならばデザイナーと製作者が工場綿密な情報交換を行うべき重要な初期工程が、コロナ禍で叶わなかったことは、デザインの意図を正しくインプットし、製作可能な設計図にアウトプットする自身の実施設計において、苦慮しましたが、その分細心留意して臨みました。製造スタッフは、日ごろ使用しない部品の取り扱いや加工物に、戸惑いながらもチャレンジ精神で取り組み、完成できました。試作は、新しいアイデアや技術を生み出す可能性があり、製造工場としても学びの多い機会となりました。